青山教会会報

「新しい心」

エレミヤ書三一章三一～三四節
コリントの信徒への手紙二　三章三～六節

牧師　増田将平

「あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙です」

この言葉を聞いたコリントの教会の人々は首をかしげたに違いありません。実に問題が多い教会だったからです。パウロは続けて言います。

「わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています」

「教会の作者を見なさい、それはキリストではないか」と語りかけます。教会はキリストが、パウロを始めとする牧師たち説教者・牧師として用いて書かれた手紙なのです。パウロたちは神に用いられたペンに過ぎません。大事なのは誰が書いたかであってペンは二の次のはずです。ところがコリントの教会の人々は作者である方を見失い、教会を建てるのが人間であるかのように人に心を奪われていました。

キリストが記した「教会という手紙」にはどのような言葉が記されているのでしょうか。パウロはこう語ります。「文字は殺し、霊は生かす」。ここでの文字は「律法」を指します。律法とは神様との正しい関係について、それは具体的にどのような生き方であるかを記したものです。律法の代表が十戒です。神様はかつてエジプトで奴隷であった民を救い出し、民と契約を結びました。エレミヤ書でそれが「古い契約」と言われています。神様は契約を結んだ民にふさわしい生き方を示した十戒を与えました。

ところが、民は主人である神様を捨て、自分たちが主人になることを選んだのです。神から独り立ちして自分の力に頼るようになったのです。本来律法は人を生かすものであったのに、民は律法を捨て自己中心的に生きることによって神様と共に生きる命を失ったのです。

その民に対して、神様の側からこう言われました。

「しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである」

だから、わたしたちは神様と契約を結ぶ資格がない人間であるとパウロは言います。誰かと契約を結ぶことは関係を持つことです。そのため契約を結ぶときは相手を調べ審査します。では、神様と契約を結ぶためにわたしどもが審査をされたら誰が合格できるでしょうか。

「わたしたちの資格は神から与えられたものです」。わたしどもは全く資格がないのに、神様がわたしどもに資格を与えてくださったのです。十字架にかけられる前にキリストは言われました。

「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である」。キリストは資格のない者たちのために、ご自分が十字架につくことによって契約を結ぶ資格を与えて、わたしと契約を結ぼうと言われます。すでに準備は整っています。あとは、わたしどもが受け入れることです。

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」。「言」、「その名」は、イエス・キリストを指しています。「信じる」とは「受け入れること」です。つまり、キリストが資格のないわたしのために苦

しみを受けて十字架で死んでくださったことを受け入れることです。キリストがくださる資格を頂いて、神と新しい契約を結んで頂いた人々が教会です。

新しい契約に結ばれた人は新しい契約に仕えて生きることができるようになります。それまでは自分の欲望に仕えて生きてきた人がキリストのために生きるようになるのです。

「もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません」。新しい契約に仕えるための力も神が与えてくださるのです。聖霊なる神様がわたしどもの心に働いてくださるからです。

「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちに新しい霊を置く。私はお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」。聖霊のお働きにより、石のように硬くなり頑固になっていた心を作り変えてやわらかな新しい心を与えてくださるのです。エレミヤ書は、神様ご自身がわたしどもの心に働いてくださり、私どもの心に言葉を記してくださることを預言します。

「彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知る」と記されます。「知る」とは、頭の知識のことではありません。神様が生きておられ、わたしどもを愛しておられることを知るようになります。すると人は神様を愛するようになり、神様に仕えるようになるのです。

先日向山怜子さんが天に召されました。この方は若くして病を得ました。それでもご主人、お嬢様方に支えられ礼拝に来ることを喜びとしておられました。何よりも讃美歌を歌うことを愛しておられた方です。向山さんが賛美するお姿から、神様を賛美して生きることの幸いを見ることができました。向山さんの存在はまさに神様からの手紙でした。やがて怜子さんという手紙を受け取った、ご主人の弘毅さんが洗礼を受けました。

教会という手紙に記された言葉は「福音」です。神様が私どもの人生において「福音」を書き込んでくださる。この手紙は神の民である「教会」に記され、同時に教会に生きる一人ひとりの人生に記されています。

教会という手紙の宛先はこの世界です。

ある人がこう言っています。

「この世は聖書を読むわけではない。イエス・キリストがこの世に宛てた手紙、つまり教会の中に読み取る。この教会の存在がないと、神の言葉は人々に理解されることはないのである」

キリストからこの世界への手紙、それが教会です。なぜキリストは手紙を記されたのでしょうか。この世界に伝えたいことがあるからです。それが福音、神様からの愛の言葉です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネによる福音書三章十六節)。教会は神様からこの世界へのラブレターです。この手紙を形作っているわたしどもは、それぞれの家庭に、職場に、学校に、福音を知らせる手紙とされているのです。最後にある説教者の言葉を紹介します。

「この際、コリントの教会が問題の多い教会であったことは、我々の慰めです。あの人たちもキリストの手紙にされたのです。それなら我々も恐れなくてもいいのです」

(三月十一日主日礼拝説教要旨)